

近畿大学中央図書館「勸修寺文庫」瞥見

文芸学部 文学科 准教授 藤 巻 和 宏

中央図書館に「勸修寺文庫」というコレクションがある。勸修寺とは京都市山科区に所在する真言宗山階派の大本山であるが、その旧蔵の古典籍（仏書）ということで、これまでにいくつかの真言宗寺院で資料調査をしてきた私は、平成 23 年 4 月に本学に着任した時からこのコレクションが気になっていた。しかも、勸修寺と至近距離にある随心院（真言宗善通寺派大本山）の資料調査を長く続けていたこともあり、この奇縁に驚いたものである。

とはいえ、勸修寺文庫の目録を見てみると近世の版本が大半であり、主に中世の写本を中心に調査・研究をしてきた私は、本文の固定した後代の資料にはあまり食指が動かなかった。もちろん、近世であろうと版本であろうと、資料的価値が低いということにはならず、このコレクションから引き出せる知見は大きなものであらうと予想されるが、ほかにもやるべきことが山積しており、優先順位のかなり下位に位置付けたまま 2 年半が経過してしまった。このたび、『香散見草』への寄稿を依頼されたのを機に、じっくり時間をかけて調べてみようと思い、平成 25 年 10 月から調査を開始したのである。

調査に先立ち、気になったことが三点。第一に、中央図書館ホームページの「コレクション」のページで紹介されていた^{*1}勸修寺文庫の写真に写る『真言名目』という典籍の表紙右下に「観智院」と墨書されていること（写真 1）。この位置には書写者や所蔵者の名前や寺院名が記されることが多いが、勸修寺旧蔵書であるにもかかわらず、東寺観智院



写真 1

の名が記されているのはどういうことか。第二に、所蔵一覧としてアップロードされていた PDF 文書（『勸修寺文庫目録』（近畿大学中央図書館、昭和 47 年）^{*2}を電子化したもの）の末尾に、『浄厳大和尚行状記』（上田靈城編、河内長野郷土研究会、昭和 39 年）、『浄厳・蓮体関係資料目録』（河内長野地蔵寺、昭和 40 年）、『浄厳関係資料目録』（河内長野 延命寺、昭和 40 年）なる資料が掲載されていること。古典籍コレクションの中に近代の刊行物が含まれているのもさることながら、地蔵寺・延命寺という寺院に関わる資料類が載っているのはどういうことか。第三に、そもそもこれらの蔵書類は、本当に勸修寺旧蔵なのか。仏教系の大学でもない近畿大学に勸修寺が蔵書を直接寄託することは考えにくい。受け入れ簿も残っていないとのことであり、第一・第二の疑問点と併せ、勸修寺旧蔵であるとする根拠は不明と言わざるを得ない。

さて、勸修寺旧蔵ということが仮に正しいとすれば、第一・第二の点から、勸修寺とこ

これらの寺院との間になんらかの関わりがあったであろうことが推測できる。こうした“寺院ネットワーク”は、前近代における書写・校合・貸借・伝授・整理…等の形での人・書物・知識の移動・交渉のみならず、近現代における寺院間の交渉や寺院調査チームの動向までも含めて考える必要がある。

寺院が寺院として機能するために必要であった種々のモノが、近代に至って学術調査の対象となり、多くの寺院に所蔵される文献・絵画・彫刻・仏具…といった種々の“資料”が研究者や行政の手により調査され、その存在が報告されるようになったが、これらの成果の大部分はいまだ“共有”されるに至っていない。まず、調査がおこなわれている寺院は、その過程で部外者には資料を調査・閲覧させないのが普通である。これはなにも特定グループが資料を独占するというのではなく、一点一点整理しながらの調査であるゆえ当然の措置であるが、調査は非常に長期間にわたるため、結果として一定期間、排他的にならざるを得ない。また、調査が終了し、あるいはその過程で成果を公開するに際し、それは目録・写真・翻刻…等の形で公開されることになるが、例えば文献資料の目録の場合、そこに収載される書誌データの取り方は、書名のみを載せる簡略なものから、寸法・料紙・紙数・識語・奥書…等々を詳細に記録するものまで区々である。また、書名一つをとっても書名認定の方法（外題を採るか内題を採るか等）が統一されていないと、共有という観点からはまだまだ途上段階にある。そして、文学・語学・史学・仏教学・思想史学・美術史学…等々、調査者の専門分野によっても調査の方法や目的が異なっており、たとえ所蔵資料のすべてを対象とする名目の悉皆調査であっても、その成果は大きく異なってくる。各寺院で個別におこなわれている調査の成果が統一的に共有・利用できるようになれば、非常に重要な“ビッグデータ”となることは確実である（大阪大学招聘研究員・中山一麿氏の構想）が、そのためには乗り越えな

ければならない問題があまりにも多く、現時点では、それぞれ個別に調査を進めつつ、共有の方法を模索するしかない。

このような状況下では、個々の寺院における調査成果は非常に貴重かつ稀少なものであり、地藏寺と延命寺の調査成果である『浄厳・蓮体関係資料目録』『浄厳関係資料目録』は注目に値する。現在、地藏寺の調査をおこなっている日本大学准教授・山崎淳氏に問い合わせたところ、これらは謄写版の薄い冊子であり、昭和30～40年代の信多純一・上田霊城らによる両寺の調査に際して作成されたものであろうとのことである。また、『浄厳大和尚行状記』は『浄厳和尚伝記史料集』（名著出版、昭和54年）の基となったものであるという。近代の刊行物とはいえ、こうした私家版として刊行された調査成果はほとんど流通しておらず、勤修寺との関係の有無によらず、これ自体が貴重なものと言えよう。

さらに、これがどのような形で勤修寺と関わっているのかという疑問が残り、本当に勤修寺旧蔵であるのかという問題と併せ、非常に気になるところである。しかし、調査開始に際して図書館で閲覧した『勤修寺文庫目録』には、「平成5年9月」および「平成6年5月現在」と時期を明記した書き入れがあり、『浄厳大和尚行状記』『浄厳・蓮体関係資料目録』『浄厳関係資料目録』の三書は「コレクション中に見当たらず」と注記されている。おそらく和本ではないという理由で、ある時期にコレクションから除外されたのであろうが、除外されたのみで、改めて個別の図書として登録されることはなかったようだ。20年前の時点で確認できなかったこれら三書は、現在でも所在不明のままである。三書自体の内容を知るとは、少数数の私家版とはいえ不可能ではないが（例えば山崎氏は両目録の複写を所持しているとの由）、かつて勤修寺文庫として一括されていた三書そのものが持つ情報が失われたことは遺憾である。当時の地藏寺・延命寺の調査と、勤修寺文庫との関係が、例えばこれらに注記やメモ等の形でそれを示唆

する痕跡が残されていたかもしれない。ともあれ、再びこれらが発見されることを期待する。

さて、では勸修寺文庫の古典籍を実見したことにより判明したことを報告する。

現在、近畿大学図書館 OPAC で「080- 勸修寺文庫*」と検索すると 126 点の典籍がヒットするが、『勸修寺文庫目録』に平成 5～6 年に書き入れられた通し番号によると、前記三書を除外し、新たに書き加えられた『宇治郡名勝誌』を含め 125 点。しかし、これは仏書ではなく、明らかに勸修寺文庫に含めるべきものではないが、現状、これも含めて登録されている。OPAC と目録とで点数が異なるのは、冊数ではなく 1 点として数える典籍の認定基準の相違による。

調査は、まずは写本の確認から始めた。大部分が版本であるが、写本が 7 点(計 17 冊)*³あり、これらの識語・奥書から勸修寺との関わりが見いだせるかと期待したのである。しかし、残念ながらそのような内容は記されておらず、また、蔵書印も捺されていなかった。

次に、目録の順番に従って一点一点の典籍を確認することにし、本稿を書いている 11 月 10 日現在、79 まで確認済みである。

目録番号 1 の古活字版『悉曇字記』で、いきなり勸修寺との関わりを示す痕跡が見付かった。「勸修寺／大経蔵」との印文を持つ蔵書印である。3.5 糎× 2.6 糎の双郭陽刻方形朱印(写真 2)。『勸修寺論輯』第二号(勸修寺聖教文書調査団、平成 17 年)に紹介される『遍数』『貞応抄』等に捺されたものと完全に一致する。この印が、冒頭と末尾(あるいは冒頭のみ)に捺される版本が多く、それらがある時期に勸修寺大経蔵に収められていたことは間違いない。また、これ以外に「勸修寺／慈尊院」双郭陽刻方形朱印(3.7 糎× 2.2 糎)(写真 3)、「勸修寺」単郭陽刻円形朱印(4.6 糎)(写真 4)が見いだせるほか、表紙や裏表紙に「勸修寺」「勸修寺大経蔵」「慈尊院」等と墨書されたものもある。これにより、勸修寺旧蔵



写真 2



写真 3

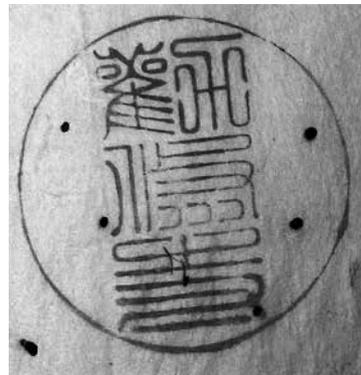


写真 4

の典籍がコレクション中に確かに含まれていることは判明したが、まだ問題は残る。即ち、勸修寺以外の寺院との関わり、および、これらが近畿大学中央図書館に入った経緯である。

まず前者であるが、蔵書印だけに限ってみても、「仁和寺／相応院」双郭陽刻方形朱印(5.7 糎× 4.5 糎)、「仁和寺／菩提院」双郭陽刻方形朱印(4.2 糎× 3.0 糎)、「阿州城下／

清水密寺」単郭陽刻方形朱印（5.7糎×3.0糎）、
「当什物／防国分精舎／現住南嶺政」単郭陽刻
方形朱印（10.9糎×6.1糎）、「文政五／防州国
分／律寺蔵書／玉淵再改」単郭陽刻方形朱印
（9.6糎×5.6糎）、「泉涌寺別院／雲龍院常住」
双郭陽刻方形朱印（4.8糎×2.4糎）があり、
ほかに所蔵寺院を示す書き入れとして、前記
「観智院」に加え、「岩国山普濟禪寺什物」「誓
願寺蔵」がある。「仁和寺相応院」「仁和寺菩
提院」の両印は「勸修寺慈尊院」印と同一書



写真5

に捺されており（写真5）、所蔵が移ったことが知られるが、他寺院名の見える典籍の多くは、勸修寺の印も書き入れもない。このことから、勸修寺旧蔵書を含む複数寺院の旧蔵書を、ある時期に誰か（どこか）が一括して所蔵しており、それが後に近畿大学中央図書館に入ることになったものと推測できる。

また、寺院以外の蔵書印として、「弘／巖」単郭陽刻方形墨印（3.1糎×3.1糎）、「泰温」単郭陽刻円形朱印（2.3糎）、「如哲」単郭陽刻方形朱印（2.5糎×1.4糎）、「常光／文庫」単郭陽刻方形朱印（2.5糎×2.6糎）等がある。これらは近世のものと思われ、奥書等からは他の人名も多数見いだせるが、近代の所蔵を示すものとしては、「堀内図書館蔵」のラベルがある。これは典籍の表紙右上に貼付され、例えば明治24年刊『異部宗論論述記発軀』に貼られたものには「第一部第二類／第一号共三冊／明治40年5月9日購／堀内図書館蔵堀内」とある（写真6）。

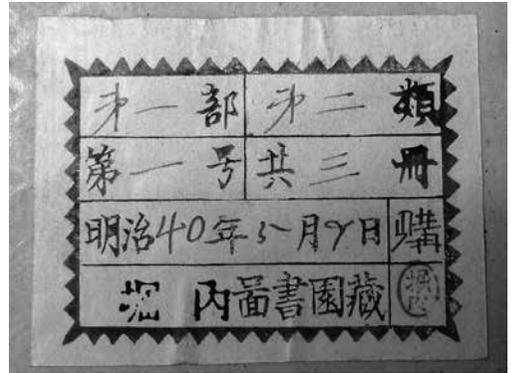


写真6

この堀内とはいかなる人物であろうか。元禄三年（1690）刊『頭書 教誠律儀』や明治28年刊『標科傍訓 七十五法名目』の裏表紙に「京都東寺中学生徒 堀内良快」と見えるが、「東寺中学校」の名称が現れるのは大正15年であることから（明治40年前後の呼称は「私立古義真言宗聯合中学校」）、堀内図書館のコレクションは良快より上の世代の人物の手になるものであろう。その人物は、明和五年（1768）刊『校正 二十唯識論述記』の裏見返に「明治四十一年四月／聯合京都大学入学之際求之／堀内文庫」と書き入れた良快の血縁者であり、真言宗聯合京都大学（現在の種智院大学）に在籍していたことがわかる。勸修寺や東寺・仁和寺・泉涌寺を含む古義真言宗の十四の本山が経営に携わり、真言宗寺院の子弟を受け入れていたこの大学に在籍していた堀内家の人物は、明治期に刊行された仏書（明治23年刊『冠導 百法問答鈔』、明治24年刊『異部宗論論述記発軀』等）を仏教学の学習のために購入してただけでなく、近世の仏書（『頭書 教誠律儀』『校正 二十唯識論述記』等）も蒐集しており、勸修寺文庫のうち何冊かに名が見いだせる。堀内の名の見えない他の写本・版本が堀内家の人物の手によって蒐集されたものであるか否かについては不明とせざるを得ないが、勸修寺を含む真言宗寺院の旧蔵書に比較的容易に接することのできる環境に身を置き、少なくとも勸修寺文庫の一部分の蔵書形成に関わった堀内家は、このコレクションと近畿大学との繋がりを考

える際に逸することのできない一族であろう。堀内図書館の蒐集がおこなわれていた時期は、まだ近畿大学の建学以前であるが、その後、堀内良快、あるいはその関係者によって、堀内図書館の蔵書を含む一大コレクションが近畿大学にもたらされたのではないだろうか。その経緯はいまだ不明であるが、ひとまずは堀内家に注目して明治末から大正・昭和にかけての動向を調査しつつ、一方で、コレクションとして一括される以前の一点一点の典籍から見いだせる当時の寺院ネットワークについても考察をめぐらせてみたい。

たもの」と記載されるものの、それ以上の情報はなく、図書館の原簿台帳を確認しても購入記録は発見できなかった（寄贈もなし）との由である。また、堀内氏と近畿大学との関連を示す記録も見付からなかったとのことであり、諸々、今後の調査を委ねざるを得ない。

*¹本調査の結果を受け、より正確な情報の提供準備のため、現在、中央図書館ホームページのコレクションのページから勸修寺文庫の解説は一時的に取り下げられている。

*²現在中央図書館事務部に置かれているものには刊記がないが、『改訂新版 全国図書館案内』下（三一書房、平成2年）の「近畿大学中央図書館」の項に、「『勸修寺文庫目録』（昭四七）」と記される。なお、本項には勸修寺文庫について「『近畿大学報』に紹介あり」と記されるが、「近畿大学報」のバックナンバーに当該記事は見いだせなかった。

*³目録掲載順に、明和元年（1764）写『法華最深秘鈔』三冊、文化十四年（1817）写『妙法蓮華経風調記』六冊、書写年代不明『法華要解別考』二冊、書写年代不明『大毘盧遮那成道経心目』一冊、享保十年（1725）写『些々疑門』一冊、書写年代不明『即身成仏義問題』一冊、享保八年（1723）写『覚源鈔』三冊。

追記

再校時、中央図書館事務部図書総務課青木斐氏より、『図書館報』1巻5号（昭和46年）に、勸修寺文庫の展示について記載があるとの情報を得た。ただし、「曾て京都山科勸修寺がもつていた仏書・和本で、本学が買い取つ